

第9回 環境と持続可能な発展

はじめまして。2002/2003の一年間、UCLの修士課程 Development Planning Unitにて、Environment and Sustainable Development を学んでおりました望月由美香と申します。森下さん、山崎さんと同じ学部でしたが、コースは違い、私のコースは計9名でした。今回このような機会を与えて頂き、恐縮ながら、少しでも開発学を目指す方々の参考になればと思い、筆をとらせて頂いております。

山梨の大田舎で育った私は、当たり前のように触れられる大自然の中、多くの不便を不便とも気付かず成長して参りました。時が経つにつれ、過疎が深刻化し、蓮華畑が観光事業の一つとして博物館に変わり、見渡しのよかった田んぼ一面がマンションへと姿を変えました。住民が望む本来の開発とは、必ずしも表面的で一時的な解決策では補えないものだと感じたのは、これが始まりでした。

そんな私が在籍したマスターコースの一番の魅力は、その多様性に尽きると言えます。総勢約90名、33カ国からの学部生は、それぞれに全く違った文化や、職業、経験をもち、グループワークを中心に進められる授業では、基本的な文化や価値観の違い、開発に対する意識の違いなどからの困難はつきませんでした。しかしながら、そんな彼らとのグループワークを通じて、相手の意見を尊重しながら学びあい、信頼性及び実現性の高い最終結論を出すという、相互理解のプロセスを学んだように思います。

開発学の理論を様々な方向から(環境、環境政治、環境法、ジェンダー、社会開発、貧困との関係など)学ぶと同時に、ロンドン東部の未開発地域やガーナでのコンサルティング研修を通じ、理論と現実の狭間で生じるギャップをどのように埋めるか、といった、実質的な活動もして参りました。地元の団体や地域の人々とのインタビューでは、開発を進めるにあたって生じる衝突、地元住民への配慮の不足、住民の本音などを聞くことができ、とても貴重な経験となりました。特にガーナでの視察では衝撃的な現実を前に、言葉を失いつつも、短期間で行った地元民とのインタビューを通じ、彼らの切実な思いを知り、環境、経済、政治、社会の4方向からのコンサルティングを進め、最終報告書を製作しました。修士論文では、ブラジル、ポータレグレの住民参加型環境予算政策を研究し、開発における地元住民の参加の重要性、及びそれに伴う地域の特性や地元民の要求に柔軟な開発計画の有効性を学びました。

森下さん、山崎さんの紹介にもありましたように、振り返ると、こんな屈辱は日本に居たら味わえないというくらい、とてもつらい一年でした。各国を代表するようなクラスメイトを前にしながらのプレゼンは、一時間を越えるものも多く、コースで唯一の日本人だった私は、はじめはとても緊張し、朝からワインを飲んで臨んだこともありました。何度も本気で帰国を考えたこともありましたが、波のように押し寄せるエッセイやプレゼン、試験に追いついていくことが精一杯だった様に思います。そんな私を励まし続け、中退を引き止めてくれたのは、クラスメイトのみんなでした。彼らの暖かさや心の広さには感謝の言葉がありません。特に試験前はコースのみんなが集まり、それぞれにわからないところを聞き、得意な分野

を説明するといった勉強会をし、理解を深めることができたと同時に試験への不安を解消することができました。マスター証書を手にした今、あの時やめなくてよかったと、心から友達や家族に感謝しております。

マスターでの一年間で気付いたことは、開発とは人間とのやりとりだということです。一方通行ではない、現地住民とのやりとりが、重要な解決策へと導いてくれるのだと思います。環境とは決してマニュアルを当てはめられる分野ではなく、その土地土地の特性をいかし、その特性に合った計画をし、住民を中心に開発プロジェクトを進めていく。それが持続可能なものへとなるのではないのでしょうか。特に後発国の原住民は、基本的なニーズ(食料など生活に必要な最低限の資源)を満たすために、地元の環境への依存率がとても高く、彼らにとってみればその自然環境の変化は、生活自体がかかった大問題なのです。そんな中、開発事業によって彼らの地元の自然にアクセスする権利をコントロールしてしまうのは、彼らの社会的、経済的なステイタスを低くし、その土地が元来もつ秩序を乱すことになり兼ねません。それを防ぐためには、住民参加型の開発計画と、それを住民が信頼して協力できるような情報提供や教育を徹底することだと思います。同時に現地の伝統的文化や権力関係を理解する必要もあるように思います。特に後発国の村落には、宗教的または伝統的な権力関係が存在し、我々の予測の域をはるかに超える、根強い力関係があるのです。そういった権力関係や伝統的宗教的文化を無視しながらの開発計画は決して持続可能なものにはなりません。そんな状況の中、開発計画において何よりも有効かつ現実的な知識というのは、開発コンサルティングのプロフェッショナルな知識でもなく、政府の掲げるトップダウンな政策でもなく、なによりも、現地のあらゆるシチュエーション、伝統をよりよく把握した現地住民のローカル知識なのであり、そのような‘勘’に近いものが最も重要視されるべきであり、信頼性が高いのだと気づきました。

個人的な見解が殆どとなってしまいましたが、マスターでの一年間はとても大きなものでした。知識や理解を深められたという点だけでなく、そこで出会えた人々との触れ合いもまた、私の人生において、とても大きなヒントを与えてくれました。現在はその経験を実質的なものにすべく、日々精進しております。

2004年2月29日

ロンドン大学 University College London

環境と持続可能な開発修士

望月由美香